
嫁ぎ先が決まりました。

静琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫁ぎ先が決まりました。

【Nコード】

N9038Y

【作者名】

静琉

【あらすじ】

突然ですが、嫁ぎ先が決まりました。男勝りな性格のお嬢様。部屋で大人しくなんて出来ない！天気がいいなら、外を馬で駆ける方が好き！でも、こんなんじゃ、嫁ぎ先が決まらないかも！？そう思っていた矢先に告げられた【嫁ぎ先が決まった】宣言。勝手に決められたのは腹が立つけれど、決まったものはしょうがない。さて、お相手はどんな人・・・？

突然ですが、嫁ぎ先が決まりました。

「……………」

「……………」

「……………ええい！！鬱陶しいわっ！！無言で睨んでも無駄だ。

決まったものは変えられはしない」

分かっていきます。分かっていますとも。ですが！！

「娘の意見も聞かず、勝手に縁談を決め、その上【一週間後に、王子本人が迎えに来るから、一緒に行け】ですって！？」

開き直ってるんじゃないわよ！！馬鹿父！！

「そうじゃなきゃ、お前なんて誰も嫁に貰ってくれないだろうが！

！」

「うぐっ……………！！」

それを言われてしまえば、最早何も反論出来ない。

勝った、とばかりに口元に笑みを浮かべて見てくる馬鹿父を睨み付けて、簡易な礼を取ると早々に部屋を出た。

セリア国第二王女　ミヤコ・レストラ。

彼女には様々な噂が立っている。それもミヤコ自身の振る舞いによるもので、事実も多分に含んでいる。

ミヤコはお茶をたてたり、花を愛でるよりは外を馬で駆ける方が好きだったし、ドレスで着飾るよりも動きやすい格好の方を選びたかった。

子供の頃はよく木に上ったりして遊んでいたが、いつしか注意され、無理矢理止めさせられた。

代わりにお茶やダンス、作法と習い事を増やされ、何度となく授業を抜け出したこともある。

そんな行為が噂され、ミヤコは“男勝りなお姫様”などと言われるようになり。そんな皮肉めいた名称が行き交った。勿論、ミヤコに色恋の噂はない。

「そりゃあ、私だって恋はしたいし。結婚だって勿論したいわよ……」

何も嫁ぎたくない。と否定してるわけじゃない。

けれど、これが『私』だ。『私』を見てくれる人と一緒になりたい、と言うのはやっぱり贅沢な望みなのだろう。

「バレル国ねえ……」

バレル国とはここ、セリア国の隣国にあたり、つい数年前に協定を結んだ国だ。

その協定を確かなものにするために、ミヤコの婚約が決まったのだ。

当然、ミヤコの嫁ぎ先はバレル国となる。

はあ、と溜め息を吐いたところで、ノック音が聞こえた。

「はい」

「ミヤコ、入るよ」

「兄様……」 現れたのはミヤコの兄、ノエル・レストラだった。

ノエルが苦笑を浮かべて入ってくる。

「……何も言わなくていいわ、兄様。私だって分かってはいるんだもの」

そうは言っても拗ねたような物言いになってしまふのは、相手がノエルだからだろう。無条件で甘えさせてくれる兄は、いつでもミヤコの味方をしてくれた。

「ミヤコが納得しているなら、それでいい。でも、本当に嫌だと思ふのなら、遠慮なく俺たちに言いなさい」

ノエルが優しい手つきでミヤコの頭を撫でながら言う。

俺たち、と言うのはノエルの双子の姉、アヤメの事を言っている

のだろう。二人は歳の離れた妹であるミヤコをとても可愛がってくれているから。「父上だってお前のことを心配してることは忘れちゃいけないよ?」

「はい」

ノエルに返事を返したところで、ミヤコはそう言えば、と切り出す。

「兄様、私を宥める為に来てくれたの?」

ミヤコを溺愛しているノエルなら、それもありだろうが、それだけではない気がしたのだ。

「ああ。そう本題は別なんだ」

「?」

「明後日、パーティーが開かれることになった」

「明後日?パーティー?」

「お前の結婚祝いを兼ねた御披露目パーティーだそうだ」

「……………兄様、」

言いたいことは沢山ある。あるけれどっ!!

ミヤコは脱力感に襲われ、うなだれる。

ノエルが軽くミヤコの肩を軽く叩いた。

「こっちのドレスの方がいいでしょうか？」

それとも……、とミヤコ付きの侍女は次々にクローゼットからドレスを引っ張り出し、ミヤコに宛てていく。

もう好きにして。ミヤコは早々に音を上げているのだがそれにも関わらず、侍女はドレス選びに夢中だ。

「ミヤコ様、やっぱり私はこっちの色がお似合いだと思うのです」
侍女が選んだのは、薄紫色のドレス。確かに彼女のセンスは悪くない。薄紫色のドレスは着飾ることがあまり好きではないミヤコから見ても、好みの色だ。

「マリー……。そのドレスは好きよ、でもね、そんなに張り切らなくても……いいんじゃないかしら」
少々うんざりとした感じで告げれば、侍女のマリーは諭すようにミヤコの名を呼ぶ。

「ミヤコ様。明後日はミヤコ様の御披露目パーティーなんですよ？
主役なのですから、私としてはもっと明るい色で行きたいんですが」
「嫌よ。」

「分かっています。ですから、これは我慢なさって下さいますよね？」

小さい頃から侍女としてミヤコに付き添っているマリーにとってミヤコの扱いはお手の物だ。

にっこりと笑って見てくるマリーに、「はい」と承諾する以外にミヤコに選択肢はなかった。

あの後。

明後日にミヤコ・レストラの御披露目パーティーが開かれる、その兄のノエルから聞かされた直後、ミヤコは再び父の下に走った。

「お父様！！」

辛うじて残っていた理性で扉をノックする。だが、理性はそこまですで返事を待たずに感情に任せて扉を開け放った。

扉の前に居る衛兵はミヤコのそんな行動はいつものことなので、大して気にした様子はない。

「なんだ、まだ何かあるのか？」

机に向かい、公務の真つ最中であろう父の前にズカズカと足を進める。

「兄様から、明後日に私の御披露目パーティーを開くと聞いたのですが、ご冗談ですよね？」

「なんだ、そのことが」

やれやれ、と頭を振る父に怒りで顔が引きつりそうになるのを抑えて聞き返す。

「私がそう言う場が好きではないことを知っていますよね？それに、そんなことに財を使うくらいならば、他のことに回してくださいと私も気兼ねなく嫁げるのですけれど！？」

バカなことに無駄な財を使ってどうするんですか。

「別にお前の為に開くわけじゃない。これも我が国の為だ。華やかな場を開けば、それだけで民にも潤いが回る」

それだけを言いに来たのなら、戻って明後日のドレスでも選べ。

話は終わったとばかりに、再び公務に取り掛かれてはミヤコが口を出せはしない。

「そう言うことなら、分かりました。……ですが、一つお願いがございませう」

ミヤコの言葉に書類から目を離し、視線を向けてきた父にミヤコは更に言葉を続ける。「その御披露目パーティーは仮面を付けての参加、という形をとって頂きます」

訝しげな視線をミヤコは見ないふりをして話を進めた。

強制的に参加せざるを得ないのであれば、好きにさせてもらおうではないか。

「私は堅苦しいパーティーなど好きじゃないわ。強制的に参加させられる身として、楽しいパーティーの方がいいの。仮面で顔を隠していれば、身分など考えずに楽しめるでしょう」

反論は受け付けません、と言うようにきっぱりと言い放つ。

「では、お父様。よろしくお願いします」

スカートの手端を持って優雅に礼を取ると返事も聞かず、そのままミヤコは自室へ戻った。

ミヤコが部屋を出て行った後に、「誰に似たんだか……」と呟かれたことなど知る由もない。しかも、その呟きを聞いて側近の一人が「間違いなく貴方です」と思ったことも、彼女は知らない。

ミヤコの一日が過ぎるのはあつと言う間だ。

マナーの勉強や、政治・経済。国の歴史・成り立ち。そして、ダンス。このダンスこそ、ミヤコの一番の難敵だった。

「そう、そこで右足を半歩前に出して」

「は、半歩……？」

いきなり半歩とか指示出されても……。こ、これくらい？

「っ！？」

「ああつ、ごめんなさい！！」

半歩どころか一歩弱くらい前に出してしまったらしい。ミヤコの足が講師の足を踏む。

とつさに体重を移動させて直ぐに退かすも、踏んだ事実はなくならない。

「……ミヤコ様、今日はこの辺にしましょう」

「うう……はい……。ありがとうございます」

講師から少し離れて、一礼。

では、また次のレッスンに、とちよつと足を引きずって出て行く講師の様子にミヤコは申し訳なく思う。

どうしても同じところで躓いてしまう。

先生、こんな下手くそに付き合わせてごめんなさい。足、ちゃんと冷やしてね。

何度か踏んでしまった先生の足を気にしつつ、ミヤコは用意されたお茶セットに手を伸ばした。

「あ、これ美味しい」

思わず零れた眩き。ミヤコの顔に自然と笑みが浮かぶ。

「失敗してもそうやって、笑って差し上げれば大丈夫ですよ」

空いたカップに紅茶を注ぎながらマリーが告げる。

「そうは言ってもね、マリー。あんなに何度も足を踏まれちゃ、誤

魔化されてはくれないわよ」

「ミヤコ様はダンスが一番苦手でございますからね」

苦手だから、やらない。とはねのけられれば良いのだが、そうもいかない。ダンスは身に付けなければいけない社会的必須スキルだ。

「ミヤコ様、気分転換に白夜に会いに行かれては？」

「いいの？」

窺う様にマリーを見れば、仕方ないと言うように肩を竦められた。マリーの言う白夜とは、ミヤコの愛馬である。

「ミヤコ様は白夜と駆けている時が一番楽しそうですから」

「マリー……」

「いいの？本当に？」

嬉しさに顔がにやけてしまう。

「但し、一時間です。それ以上は私が王様に叱られてしまいますので」

マリーが指を一本立てて、言い聞かせる。

「大丈夫！！分かってるわ……」

居ても立ってももられず、ミヤコはスカートの裾を掴んで着替えるために部屋を飛び出す。

「ミヤコ様……走ってはいけません……」

「マリー、また後でね……！本当、好きよ……」

「そっ、そう言うのは恋しいと思う殿方に言ったださいっ……」

マリーの言葉に笑って、ミヤコはまた走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9038y/>

嫁ぎ先が決まりました。

2011年12月1日00時54分発行